

アートマネジメント人材等海外派遣プログラム

2024年度実施報告書



目次

03	はじめに
	事業概要
04	企画内容
05	派遣先とプログラムの流れ
06	応募状況
	ヴェネツィア・ビエンナーレ、ミラノ、ローマ
08	派遣先プログラム概況
10	ベーシック・プログラム
12	REPORT 岩田 智哉
14	戸塚 愛美
16	三木 茜
	インドネシア・ダンス・フェスティバル(ジャカルタ)、 ドラマリーディング・フェスティバル(ジョグジャカルタ)
18	派遣先プログラム概況
20	ベーシック・プログラム
22	REPORT 菊地 もなみ
24	黒木 裕太
26	寺田 凜
	CINARS(モントリオール)
28	派遣先プログラム概況
30	ベーシック・プログラム
32	REPORT 臼田 菜南
34	大塚 健太郎
36	大野 創
38	笠川 奈美
40	報告会
41	総括-今後に向けて

はじめに

東京都は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーの反映や、新型コロナウイルス感染症の影響、持続・共生社会へのシフト、デジタル化の進展など、社会環境が大きく変化しているタイミングを捉え、2030年度までの東京都の文化行政の方向性や重点的に取り組む施策を示した「東京文化戦略2030 ～芸術文化で躍動する都市東京を目指して～」を公表した。

東京文化戦略2030では、4つの戦略の1つ「国内外のアートシーンの中心として、世界を魅了する創造性を生み出す ～芸術文化のハブ機能を強化する～」において、東京の芸術文化の発信力を高め、将来的に世界から多くの芸術文化関係者、インバウンドを惹きつける都市となることを目指す「海外発信プロジェクト」を掲げており、アートマネジメント人材等海外派遣プログラムを、その中に位置付けている。

これまでも都は、創造活動に対する助成や、展覧会や公演など発表の場の提供を通じて若手アーティストを支援し、コロナ禍においても、渡航制限をはじめ多くの制約がある中で、デジタル技術を活用した発表の場・交流機会の確保などの支援策を展開し、多くの才能を発掘してきた。こうした経験を活かしつつ、今後更に世界に通用する作品を生み出すとともに、その価値や芸術性をより広く届けていくためには、芸術文化を支える演出家やプロデュー

サー、キュレーター等のアートマネジメント人材の育成も欠かせない、こうした課題認識のもと、令和5年度から新たに本プログラムを開始した。

本プログラムは、①世界最先端の演出や舞台技術、作品や展示手法等に直に触れる、②第一線で活躍する海外の専門人材との人脈づくり、の2つの目的を柱として、海外の著名な芸術文化機関やシアター、芸術文化フェスティバルに概ね1週間程度派遣を行うものであるが、国内で活躍されている専門家からの協力を得ることで、派遣先の調整やキーパーソンとつないでいただくなど、個人では得難い有意な体験の提供を実現することが出来た。

今年度は、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ミラノ、ローマ、インドネシア・ダンス・フェスティバル(ジャカルタ)、ドラマリーディング・フェスティバル(ジョグジャカルタ)、CINARS(モントリオール)の3か国に10名を送り出したが、各々が獲得した知見やネットワークを派遣参加者の中だけに留めるのではなく、共有・集積していくことで、未来の東京の芸術文化を牽引する、意欲溢れる若者たちの海外への挑戦を後押しするものになると考え、本報告書のとりまとめを行った。

本プログラムが、国際的な視点を持ったアートマネジメント人材等の育成に寄与し、東京から世界を魅了する作品を生み出し発信していく第一歩となれば幸いである。

事業概要

企画内容

主旨

- ・ 将来アーティストと社会をつなぐ役割を担う若手アートマネジメント人材を短期で芸術フェスティバル等に派遣し、国際的な活動の第一歩となるよう、海外の芸術文化関係者とのネットワークを作る機会を提供する。
- ・ 海外の先駆的な作品や創作現場に直に触れることで、国際的な視点に立った創作の機運醸成を図る。
- ・ 将来的にはこの事業を通じて東京と各派遣先との連携を深め、東京と海外セクターとのネットワーク構築・強化に繋げる。

派遣対象者

- 連携する派遣先に準じて、対象となる芸術分野を選定。
- ★ 舞台芸術分野（演劇、舞踊、音楽等全般）に関わるプロデューサー、ディレクター、舞台技術者等
 - ★ 視覚芸術分野に関わるディレクター、キュレーター等アートマネジメント人材
- 各分野ともに以下の条件に全て当てはまることとする。
- ・ 海外での公演や、海外セクターとの交流や共同制作などに興味があり、海外での実務経験がない・あるいは少ないこと
 - ・ 芸術分野関連の現場経験が3年以上あること
 - ・ 本プログラムに参加した成果を今後の活動に活かす意思があること
 - ・ 首都圏在住者で都内での活動を主としていること
 - ・ 応募時点で必要な残存期間のある有効なパスポートを所持していること

プログラム

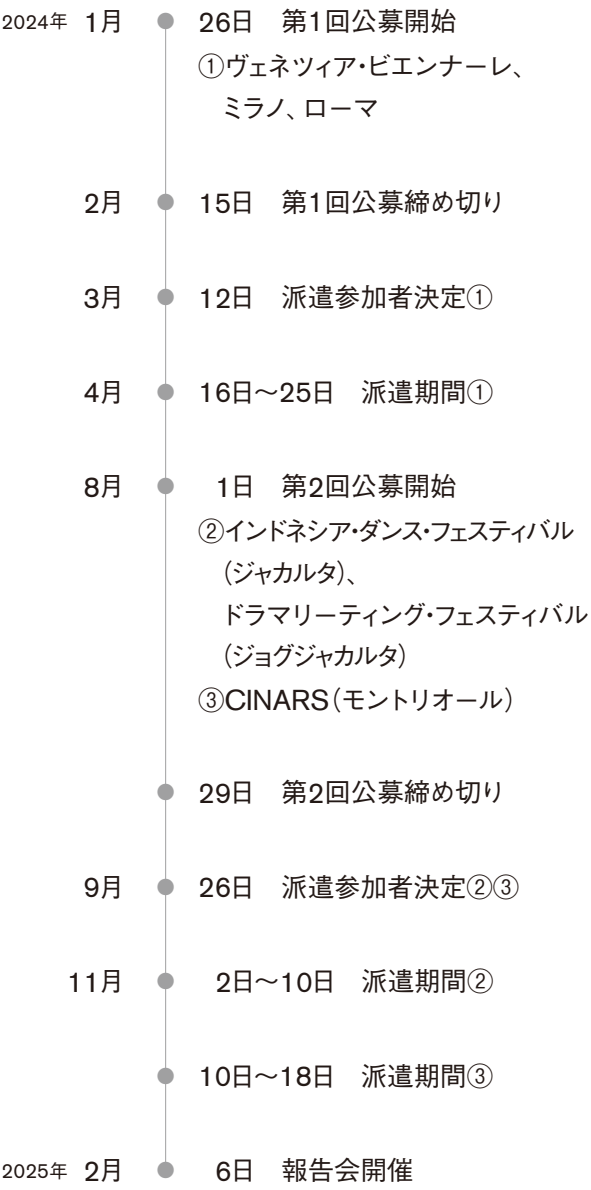
- 約1週間の滞在中のプログラムとして、主催者側で設定するベーシック・プログラムと、派遣参加者自身が調整して設定するオリジナル・プログラムを設定。いずれも、派遣決定後に、主催者と協議しながら決定。
- 【ベーシック・プログラム】
- 主催者側で調整し設定する共通プログラム。現地での面会先や視察先を主催者側が調整。滞在期間中、必ず実施していただくプログラム。
- 【オリジナル・プログラム】
- 派遣参加者が自らリサーチし、企画・調整するプログラム。派遣決定後、各自で事前に派遣先のリサーチを行い、また、関係各所視察・ヒアリング先を検討・調整して実施するプログラム。

支援内容

- ・ 日本と派遣先の往復航空賃（エコノミークラス）
- ・ 現地宿泊費
- ・ 日当：現地滞在1泊につき1万円
- ・ 海外旅行保険
- ・ その他、派遣先でのスケジュール・プログラムの調整、現地での関係者の紹介、アドバイスなどのサポート

派遣先とプログラムの流れ

- 2年目となった本年度は、昨年同様、派遣先の地理的バランスを考慮し、かつ舞台芸術分野と視覚芸術分野の2分野を対象として派遣先を選定した。結果として、視覚芸術分野を代表するビエンナーレである「ヴェネツィア・ビエンナーレ」、舞台芸術分野においては世界最大規模の国際プラットフォームである「CINARS（モントリオール）」と、東南アジアで最も古いコンテンポラリーダンスのフェスティバルである「インドネシア・ダンス・フェスティバル」をメインとした3カ国への派遣となったことは、貴重な機会を活かすことになり、今年度の1つの特徴といえる。なお、ヴェネツィア・ビエンナーレについては4月開催であったため、昨年度内での公募と派遣参加者の選考となった。



事業概要

応募状況について

応募についてはヴェネツィア・ビエンナーレ、ミラノ、ローマ派遣に19名、インドネシア・ダンス・フェスティバル(ジャカルタ)、ドラマリーディング・フェスティバル(ジョグジャカルタ)派遣に5名、CINARS(モントリオール)派遣に14名の応募があり、今年度応募者数は全体として延べ38名、平均年齢34.8歳となった。昨年度は3地域合わせた応募者が延べ88名であった。応募者数自体は減少となったが、昨年度については、エディンバラ・フェスティバルやブロードウェイなど、派遣先のわかりやすさや、ブロードウェイ派遣については対象を俳優・アーティストまで広げたこともあり多くの方の応募につながった。ただ、全体の応募者の平均年齢が昨年度・今年度とも、ほぼ34.7歳となった。ちなみに、20代の応募者の比率はどれも20%台であったが、CINARSは20代の応募者が40%となっている。

また、海外での活動経験があまりない若手を派遣対象者として想定しているが、特にアジア圏のフェスティバル派遣については、既にアジアでの活動実績もあり、アジアでのネットワーク・コラボレーションに課題意識がある応募者も多く、今後アジアでの活動の拡大を目指すきっかけとして応募しているケースが目立つ。ヴェネツィア派遣についても、若手とはいえ十分な活動実績をもち、自身の海外での活動の幅の充実・拡大を目指す申請が多かった。

応募者の属性(数字は人数)			
年間合計			
応募総数:2024年 38名／2023年 88名			
年代別	2024年	2023年	
50歳以上	3	8	
40～49歳	5	15	
35～39歳	6	17	
30～34歳	13	19	
25～30歳	8	21	
24歳以下	3	8	
平均年齢	34.8歳	34.7歳	
分類別	2024年	2023年	
演劇	12	48	
舞踏	4	11	
音楽	5	14	
美術	12	11	
その他	5	4	
職種別	2024年	2023年	
プロデューサー・ディレクター・キュレーターが主	26	52	
俳優・ダンサー等アーティストが主	10	19	
その他(広報・通訳)	2	17	
英語レベル	2024年	2023年	
Beginner(初級)	14	32	
Intermediate(中級)	15	32	
Proficient(上級)	2	11	
Fluent(堪能)	6	12	
Native(ネイティブ)	1	1	

ヴェネツィア・ビエンナーレ、ミラノ、ローマ

応募総数:19名

年代別	
50歳以上	1
40～49歳	4
35～39歳	1
30～34歳	9
25～30歳	3
24歳以下	1
平均年齢	35.4歳
分類別	
演劇	1
舞踏	2
音楽	1
美術	11
その他	4
職種別	
キュレーター・ディレクター等	12
アーティスト・クリエイターが主	7
その他	0
英語レベル	
Beginner(初級)	6
Intermediate(中級)	8
Proficient(上級)	0
Fluent(堪能)	4
Native(ネイティブ)	1

インドネシア・ダンス・フェスティバル(ジャカルタ)、ドラマリーディング・フェスティバル(ジョグジャカルタ)

応募総数:5名

年代別	
50歳以上	0
40～49歳	1
35～39歳	1
30～34歳	2
25～30歳	1
24歳以下	0
平均年齢	34.8歳
分類別	
演劇	4
舞踏	1
音楽	0
美術	0
その他	0
職種別	
プロデューサー・ディレクターが主	4
俳優・ダンサー等アーティストが主	1
その他	0
英語レベル	
Beginner(初級)	0
Intermediate(中級)	3
Proficient(上級)	2
Fluent(堪能)	0
Native(ネイティブ)	0

CINARS(モントリオール)

応募総数:14名

年代別	
50歳以上	2
40～49歳	0
35～39歳	4
30～34歳	2
25～30歳	4
24歳以下	2
平均年齢	33.9歳
分類別	
演劇	7
舞踏	1
音楽	4
美術	1
その他	1
職種別	
プロデューサー・ディレクターが主	10
俳優・ダンサー振付師等アーティストが主	2
その他(広報・コーディネーターなど)	2
英語レベル	
Beginner(初級)	8
Intermediate(中級)	4
Proficient(上級)	0
Fluent(堪能)	2
Native(ネイティブ)	0

ヴェネツィア・ ビエンナーレ ミラノ ローマ



派遣先プログラム概況

【派遣先について】

ヴェネツィア・ビエンナーレ (Biennale di Venezia, 英語: Venice Biennale / Venice Biennial) は、イタリアのヴェネツィアで1895年から開催されている現代美術の国際美術展覧会。イタリア政府が支援するヴェネツィア・ビエンナーレ財団が主催し、二年に一度開催され、第60回を迎えた。

この展覧会の特徴は、万国博覧会や近代オリンピックのように国別展示部門があること。参加各国はヴェネツィア市内のメイン会場となる公園やその周囲にパビリオンを構えて国家代表アーティストの展示を行う。国同士が威信をかけて展示を行い、賞レースをすることから、「現代美術のオリンピック」とも称されている。

ディレクターを務めたアドリアーノ・ペドロサ(ブラジル)は本展初のラテンアメリカ人として、また南半球を拠点とする初のキュレーターとして参加。今回のタイトル「Stranieri Ovunque-Foreigners Everywhere」は、パリ生まれでパレルモを拠点とするクレール・フォンテーヌ集団が2004年に開始した一連の作品から引用されている。「Stranieri Ovunque(どこにでもいる外国人)」には「どこに行っても、どこにいても、必ず外国人に遭遇する」という意味と「どこにいても、心の奥底では常に外国人である」という意味がこめられている。

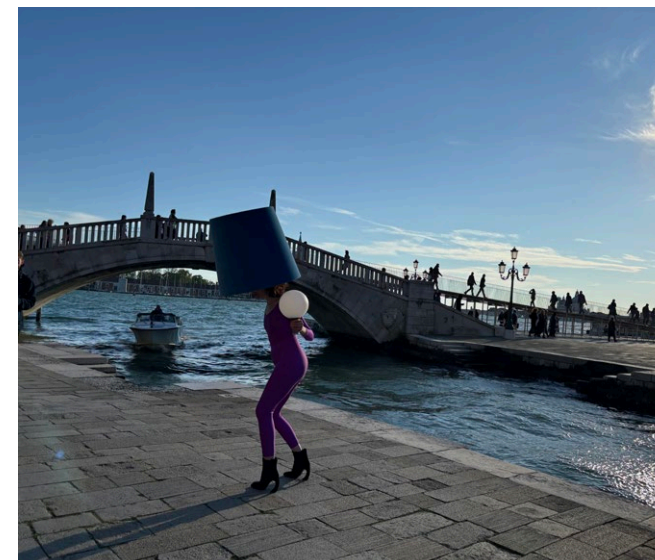
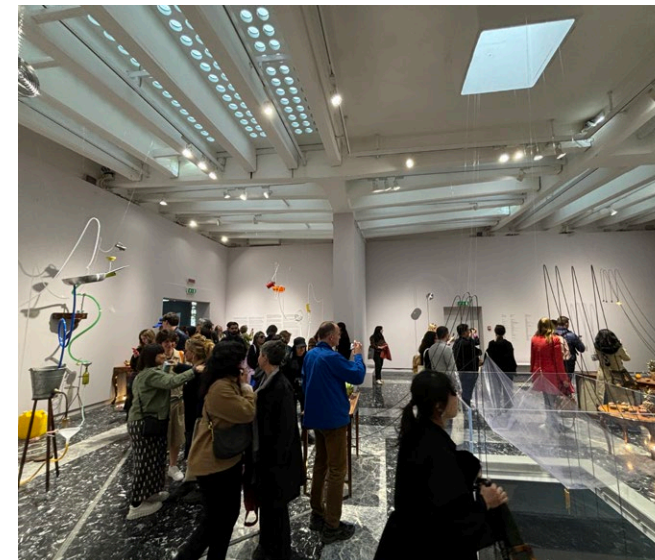
独立行政法人国際交流基金がコミッショナーとなる日本館では毛利悠子が出品作家として参加した。



【概要・趣旨】

第60回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展のヴェルニサージュ(プレ・オープニング)に合わせて派遣。開幕時に集う各国のアート関係者とのネットワークづくりの機会とする。その他、ミラノ、ローマでは文化施設への訪問・展示鑑賞、関係者へのヒアリング、アーティストのアトリエ訪問などを中心に行う。

海外の先駆的な作品や創作現場に直に触れることで、国際的な視点に立った創作の機運醸成を図る。



ヴェネツィア・ビエンナーレ ヴェルニサージュの様子

【派遣対象】

視覚芸術に関わる若手を中心とするキュレーター、ディレクター、アートプロフェッショナル等

【派遣期間】

2024年4月16日～25日

【現地コーディネーター】

波岡 冬見 NAMIOKA Fuyumi

インディペンデント・キュレーター

東京生まれ。イタリア・ボローニャ在住。在ローマ日本大使館広報文化班専門調査員を経て、キュレーターとしてのキャリアをスタート。ローマ日本文化会館(国際交流基金)では主に同館の展示ホールにおける展覧会企画を担当。それまで一般的な日本文化紹介が中心であった展示プログラムを、日本の現代美術に焦点を当てたものへと移行させた。以降、大使館在職以前のジェームズ・リー・バイアーズやエミリオ・ヴェドヴァのアシスタントを務めるとともに、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館のヴァイス・コミッショナー、プラト市のルイジ・ベッチ現代美術センターでの常設コレクション部門キュレーター、アデリーナ・フォン・フルステンベルク主催のArt for the Worldのアソシエイト・キュレーター、2010年のあいちトリエンナーレのアソシエイト・キュレーターなど、幅広いキャリアを持つ。また、ルガーノ市立美術館、およびティチーノ州立美術館(いずれも現在はLACに統合)でゲスト・キュレーターとして具体展や荒木経惟の回顧展等を企画。



ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

ミラノ

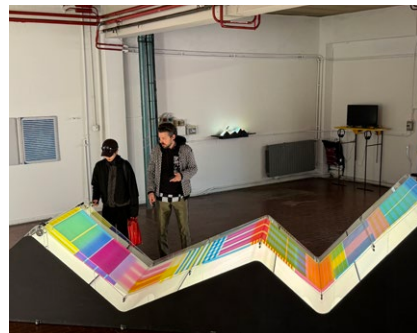
視察①

【施設名】

ASSAB ONE

【施設概要】

ミラノのオルタナティブスペース／非営利アート・スペースであるASSAB ONEを訪問。元印刷工場である同スペースは複数棟からなり、異なる展示空間がいくつもあった。運営はオーナー+3名のスタッフ（広報、プロジェクト・マネジメント、その他）で回しているとのこと。当日はミラノデザインウィーク開催のため、関連企画を開催していた。



ミーティング①

【人物名】

エリカ・ペトリッロ（インディペンデント・キュレーター）

【ヒアリング内容】

- ・欧州インディペンデント・キュレーターの関心が環境問題やサステナビリティにシフトしている。
- ・ネットワークがグローバルであり、コミュニケーション能力の高さが求められる。



視察②

【施設名】

アーティストスタジオ

【ヒアリング】

リンダ・フラニー・ナグラー（アーティスト）

- ・創作活動の拡がりについて（ファウンド・フォトのコレクションを作品として見せるなど）
- ・表現者でありながら教育者の面も持つことができる（子供向け写真ワークショップ実施など）



視察③

【施設名】

アーティストスタジオ

【ヒアリング】

廣瀬智央（アーティスト）

- ・イタリア留学後、そのままミラノに拠点を移した日本人アーティストのスタジオ訪問。コンセプトualな作品作りの中にも丁寧なヴィジュアル仕上げ→コマーシャルギャラリーでの取扱いも視野に。
- ・日本人（外国人）アーティストとして在外で活動する苦労や意識などについて。



ローマ

ミーティング②

【施設名】

ローマ日本文化会館（Istituto Giapponese di Cultura in Roma）訪問

【ヒアリング】

ヴェネツィア・ビエンナーレから基金全体、さらには外務省やその他省庁との関連から、政府による決定まで、文化政策に関する予算の仕組みについて貴重なお話を聞くことができた。

視察④

【施設名】

国立21世紀美術館（MAXXI）

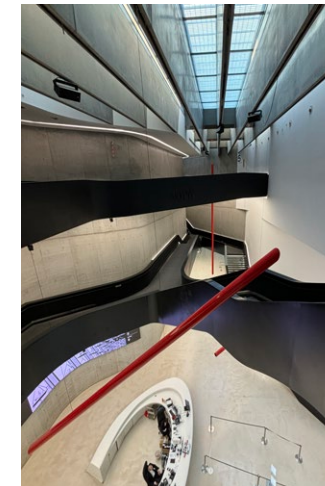
【施設概要】

2000年にイタリアの首都ローマに開館したイタリア初の国立現代美術館。「MAXXI芸術館」と「MAXXI建築館」の二つのギャラリーで構成されており、美術だけではなく優れた現代建築作品の紹介にも力を入れている美術館として知られている。

【ヒアリング】

エレナ・モティジ（キュレーター）

- ・MAXXIの体制やザハ・ハディド設計の建物について
- ・キッズワークショップやトークイベント、アクセシビリティについて



スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

Day 1	AM	● ホテル着
	PM	● ヴェネツィア・ビエンナーレ視察 ● 日本館VIP向けツアー参加
Day 2		● ヴェネツィア・ビエンナーレ視察
Day 3		● ヴェネツィア・ビエンナーレ視察 ● Joshua Serafin パフォーマンス観覧
Day 4		● ヴェネツィア・ビエンナーレ視察 ● The Hope Forum視察
Day 5	AM	● ヴェネツィア～ミラノ移動
	PM	● Pirelli HangerBicocca（現代美術展示施設）訪問 ● ASSAB ONE（オルタナティブスペース）訪問 ● Erica Petrillo（インディペンデント・キュレーター）とミーティング@Triennale Museum ● Linda Fragni Nagler（アーティスト）スタジオ訪問
Day 6	AM	● 廣瀬智央さん（アーティスト）スタジオ訪問
	PM	● Prada Foundation訪問 ● ミラノ～ローマ移動
Day 7	AM	● ローマ日本文化会館訪問 ● MAXXI訪問 展示鑑賞 ● Elena Motisi（キュレーター）ミーティング
	PM	● MACRO（ローマ市立現代美術館）訪問 展示鑑賞 ● バチカン訪問
Day 8		● ローマ発
Day 9		● 日本着

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



写真：Linda Bujoli

岩田 智哉 IWATA Tomoya
キュレーター

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修了。2022年4月より、キュラトリアル・スペースThe 5th Floorのディレクターを務める。「Gwangju Biennale Academy International Curator Course」(光州、2024年)、「2024 Workshops for Emerging Arts Professionals: New Flows」(Para Site:香港、2024年)等の国際的なプログラムやシンポジウムに参加。

オリジナル・プログラム

プラダ財団の視察

プラダ財団でアルテ・ポーヴェラの主要作家の一人であるピーノ・パスカーリ(Pino Pascali)の個展を鑑賞した。作家の初期作から晩年の作品まで、網羅的かつ文脈の作り方までしっかりしていた。また同館の過去の展覧会のカタログも手に取ったが、アルテ・ポーヴェラの作家の大規模な回顧展を数多く開催しており、どれもしっかりとした作家論等のテキストが収録されていた。ファッションブランドによる私設館で、美術館にも匹敵するしっかりとした文脈形成が展示・資料の両面からなされていたことに驚いた。



プラダ財団でのPino Pascali[ピーノ・パスカーリ]個展の展示風景より(筆者撮影)

シンポジウム「A WORLD OF MANY WORLDS」への参加

同シンポジウムの「Histories, mobilities, and intimacies in diaspora」と題されたトークに参加した。とりわけ、新たにアジア・ソサエティのディレクターに就任した中森康文氏による。国という枠組みからトランス・ナショナルへの展覧会の推移に関する分析が興味深かった。

印象に残ったプログラム

ヴェネツィア・ビエンナーレのカザフスタン・パビリオン「Jerūiyq: Journey Beyond the Horizon」展の訪問(@Venice Naval Historical Museum)

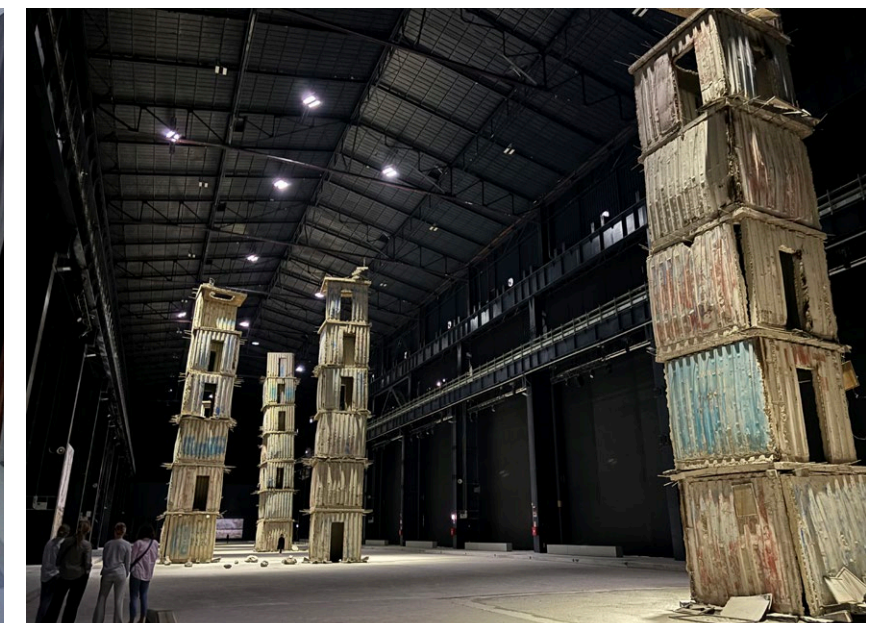
「アジア」のアートにまつわる言説であり登場しない中央アジアのアートシーン。それは、地理的なものから「アジア」をめぐる政治経済的な状況など、さまざまな要因の交錯の結果による。カザフスタン・パビリオンで開催された本展は、世代の異なるアーティストによる、同地の伝説で語られる理想郷の表象から「脱植民地フューチャリズム(decolonial futurism)」のヴィジョンを提示するという試みであった。普段あまり触れる機会のないカザフスタンおよび中央アジアのアーティストたちの関心や課題、そしてそれがどのように文脈化されるのか、という切迫した意識が見られる貴重な機会であった。



カザフスタン・パビリオン「Jerūiyq: Journey Beyond the Horizon」より(筆者撮影)

派遣プログラムを終えて

今回ビエンナーレのキュラトリアルな手法において、どのような「ケア」の思想的アプローチが見られるかをリサーチすることを目的にプログラムに参加した。しかし、その規模や構造の問題から議論の精緻さに欠くという同展の限界を目の当たりにした。その上で、改めて自分がオルタナティブ・スペースという、アートワールドにおいてビエンナーレの真逆の極点にいることを自覚しつつ、そうした磁場からどのような活動を展開することができるか、規模が小さいからこそできる議論の作り方、アーティストとの協働の仕方、キュレーションの手法があることを学んだ。この経験を活かして、大規模なアートワールドとは別の、スピード感あふれるグローバルな活動を展開していきたい。



ミラノの現代アートセンター ビレリ・ハンガー・ビコッカへの訪問



戸塚 愛美 TOTSUKA Manami
インディペンデント・キュレーター

公共空間における展示のあり方に関心を寄せ、サイトスペシフィックなアートプロジェクトに多数参画。主な展覧会に、さいたま国際芸術祭2020公募キュレーター企画展「I can speak」(2020年、さいたま市)、「Words are Bellows」(2024年、リトアニア首都ヴィリニウス)など。NPO法人BARD代表理事。

オリジナル・プログラム

ヴェネツィア・ビエンナーレ2024 ヴェルニサージュでの訪問

メイン会場の視察のほか、日本館のオープニングや、他国のオープニングに参加した。また、参加アーティストやギャラリー、国の文化機関等で開催しているパーティーやトークイベントに参加し、国際的なネットワークの拡充と、各国のアート関係者と様々な意見交換を行った。

Biennale Opening program at Ocean Space トーク:A Polyphony of Repatriations

海洋環境の今日的な課題を前提とし、アフリカのコミュニティにおける“壊れやすい物”の帰還と儀式をめぐるトークイベント。「人間動物園」といったヨーロッパの人種差別の歴史を参照し、アフリカとヨーロッパの植民地主義的な歴史的関係を取り上げつつ、環境問題に対しては、ベナン館のキュレーターによる展示内容の説明で、いかに芸術的にアプローチをしていくか、具体的実践の方法論が提案された。

ミラノの現代アートセンター ピレリ・ハンガービコッカ

常設展示のアンセルム・キーファーによる大型インスタレーションの鑑賞。イタリア大手企業ピレリ社による文化支援は力強く、国際比較として企業支援と構造のあり方を改めて考えさせられる機会となった。また、見る人を圧倒するような建物の天井高は、日本で同様な空間的演出は法律上難しいとはいえ、鑑賞における身体的・感覚的な体験にとって非常に重要だと感じた。

印象に残ったプログラム

ヴェネツィア・ビエンナーレ2024 ヴェルニサージュでの訪問

日本館に関わる多くの方の話を聞き、展示の実施に至るまでの異なる立場の人のコンセンサス・ビルディングの難しさを知る機会を得た。また、外交という政治的な意思表示が示される場での芸術固有の課題を理解するに至った。さらに、各国のインディペンデント・キュレーターの方と対話の機会があり、文化的に先進国と言われるような地域でも資金獲得に向けた絶え間ない努力があることを知り、特にインディペンデントな活動はどの地域でも持続可能性に対する難しさがあることを感じた。

派遣プログラムを終えて

研修の主な目的は、①国際的なアートの動向を把握し、今後の展覧会の検討材料とすること②新たなネットワークを構築し、国際的な活動を視野に入れるための足がかりとすること③ファンドレイジングと持続可能な芸術活動を模索すること、であった。具体的な成果として、ヴェネツィア・ビエンナーレで得たネットワークから、海外展の開催に至ったほか、各国の政治的状況や文化的背景等、様々な要因が展示作品とその鑑賞に影響されていることの概観を改めて考えることとなり、自分自身のキュラトリアルな手法を再度見つめ直す機会となり得た。今後も、持続可能な活動方法を模索しながら、国際的な活動を継続していきたい。



日本館キュレーターのイ・スッキョンさんと



Biennale Opening program at Ocean Space『A Polyphony of Repatriations』トークイベントの様子



三木 茜 MIKI Akane

アートマネージャー

武蔵野美術大学卒業後、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ修了。アートフェア東京、あいちトリエンナーレ2019、ANB Tokyoなどで事務局を経験。2023年よりフリーランスとして活動を開始し、アートと社会をつなぐさまざまな事業の進行管理や制作に携わる。クリエイティブな事務局づくりを目指し、アートと社会をつなぐさまざまな事業の進行管理や制作に携わる。

オリジナル・プログラム

フィリピン出身の若手アーティスト Joshua Serafinのパフォーマンスを鑑賞

ビエンナーレのテーマ「Foreigners Everywhere」を体感できる、他者性と共存を示唆する力強いパフォーマンスであり、現代アートシーンのキーワードであるグローバルサウスやノンバイナリーを担う若手アーティストを知ることができた。Joshua本人ともその後直接知り合い、良い友人関係を築くことができた。

アール・ブリュットの専門家 Christian Berst氏と面会

アルセナーレで展示するチェコのアーティストのレンダー（貸出主）でもあり、19年間アール・ブリュットをパリで扱うChristian Berst氏とアポイントメントをとり面会。現在日本で携わっている仕事にも関係するため、国際芸術祭でアール・ブリュットが注目されていることの政治性についてディスカッションできる貴重な機会となった。

気候変動に関するフォーラム 「The Hope Forum」を聴講

気候変動・サステナビリティをテーマにアート関係者が集まるフォーラムを聴講。アーティスト集団SUPERFLEXのBjørnstjerne、Guggenheim Museum Bilbaoのキュレーターや保険会社Lockton、オークションハウスChristie's、ギャラリーHauser & Wirth「環境的持続可能性」部門の責任者など錚々たるメンバーの議論から、気候変動を問題意識としては深刻に共有しながらも、資本主義との矛盾を抱えるアートシーンの実情を知ることができた。参加者同士がネットワーキングできるウェルカムタイムを設けるなどフォーラムの組み方としても非常に参考になった。

印象に残ったプログラム

ヴェネツィア・ビエンナーレの オープニングウィークの様子全体

特定の出来事というよりも、国際的に重要なアートイベントの規模とオープニングウィークを3日間にわたり体感できたことがとても貴重な機会だったと思う。先述したオリジナル・プログラムのほかにオープニングウィークのパーティの様子、会場の動線、マップの活用の仕方など、芸術祭というフォーマットのなかで国際情勢やイデオロギーについて議論したり、芸術によって共有できると感じた。また、各国の関係者の芸術との向き合い方を知ること、相対的に日本の芸術の文脈のあり方を考える機会になった。

派遣プログラムを終えて

これまでも海外のアートイベントの実情に関心があり、個人的に足を運んだことも何度かあるが、それらは「単なる訪問」に過ぎなかったと思う。もちろん、そういった経験も糧になっているが、今回はベーシック・プログラムを通じて、さらに自分でアポイントメントを取り、人と会うことで「何を持ち帰るか」という目的を持ってイタリアを訪れた。この経験を通じて、自分が「何者であるか」や「日本のアートシーンをどう見ているか」などを、異なるバックグラウンドを持つ人々に英語で話すトレーニングにもなった。帰国後、国内外の関係者とヴェネツィア・ビエンナーレについても意見交換する機会が多く、受け身ではなく発信する意識が強まった。



気候変動についてそれぞれの取り組みや課題をアート関係者がディスカッションする「The Hope Forum」参加



Bouchra Khalili《The Mapping Journey Project》(2008-11)、アルセナーレ、第60回ヴェネツィア・ビエンナーレ

インドネシア・ダンス・フェスティバル (ジャカルタ)

ドラマリーディング・フェスティバル (ジョグジャカルタ)



派遣先プログラム概況

【派遣先について】

インドネシア・ダンス・フェスティバル(英:Indonesian Dance Festival, IDF)はジャカルタで2年ごとに開催される東南アジアで最も長く続くコンテンポラリー・ダンスのフェスティバル。1992年にインドネシアの若手ダンサー、カリオグラファーのためのインキュベーションとして始まり、現在はインドネシア内外の舞台芸術関係者のネットワーキングの場にもなっている。2024年はジョグジャカルタを拠点にするLinda Mayasari, Nia Agustina、ベルギー出身のArco Renz、パリを拠点にする台湾人River Linによるコキュレーションで行われた。インドネシア・ドラマリーディング・フェスティバル(英:Indonesia Dramatic Reading Festival, IDRF)は、2009年に東京で開催された「アジア劇作家会議」に参加したインドネシア人の劇作家が発起人となり、2010年から毎年ジョグジャカルタで開催されてきた。インドネシアの演劇人に向けて新作戯曲を紹介する目的で始まったドラマリーディングのフェスティバルで、現在ではインドネシア国内外の先鋭的な戯曲を紹介するプラットフォームとなっている。



【概要・趣旨】

インドネシア及び東南アジア地域における舞台芸術シーンについて知るため、前半はIDFに参加。各国から集まるゲストとの交流を通して、世界のダンス・舞台芸術関係者とのネットワーキングの機会とする。またフェスティバルの運営や目的についてフェスティバル・ディレクターにヒアリングを実施。ジャカルタの文化芸術の動向について理解を深めるため、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターと、複合芸術施設コムニタス・サリハラのプログラム・ディレクターへのインタビューを行う。後半はジョグジャカルタに移動し、IDRFを視察。また、アーティストのスタジオや文化施設を訪問し、現地のアーティストやアートワーカーとの食事を共にしながらの対話を通じて、この地特有の活発なアート・コレクティブの活動やアートシーンの実態について理解する。



【派遣対象】

舞台芸術(演劇、舞踊等)に関わる若手を中心とするプロデューサー、ディレクター、技術者等

【派遣期間】

2024年11月2日～10日

【プログラム・アドバイザー】

丸岡 ひろみ MARUOKA Hiromi

PARC - 国際舞台芸術交流センター理事長、YPAM - 横浜国際舞台芸術ミーティング(旧TPAM)ディレクター、舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM) 副理事長。2003-2010年、ポストメインストリーム・パフォーミング・アーツ・フェスティバル(PPAF)創設運営。TPAMと併設してIETMアジア・サテライト・ミーティング(2008、2011年)、アジアの制作者を集めた「舞台芸術制作者ネットワーク会議」(2009年)を開催。2012年にはフェスティバル「サウンド・ライブ・トーキョー」を創設。



写真：前澤秀登

ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

ミーティング①

【人物名】

高橋 裕一(国際交流基金ジャカルタ日本文化センター所長(当時))、三宅 章太(国際交流基金ジャカルタ日本文化センター文化事業担当)、ププット・セチア・スサンチ(国際交流基金ジャカルタ日本文化センタープログラム・オフィサー)

【ヒアリング内容】

- ・ジャカルタの文化芸術環境の動向について
- ・日本と東南アジア諸国との関係性、相互理解のために必要な支援プログラムについて

ミーティング②

【人物名】

ラトリ・アニンディアジャティ(IDFディレクター)、リンダ・マヤサリ(IDFハウス・キュレーター)

【ヒアリング内容】

- ・フェスティバルの成り立ち・背景
- ・フェスティバルの姿勢や運営について(資金援助元との関係性の築き方、人材育成の面など)

視察①

【施設名】

コムニタス・サリハラ

【施設概要】

コムニタス・サリハラ・アーツ・センターは、ジャカルタ南部に位置する、シアター、ギャラリースペース、スタジオ、レジデンスを内包した複合文化施設で、IDFの会場の1つになっている。先鋭的な内容のアートを扱い、アート・フェスティバルの主催もしている。

ミーティング③

【人物名】

イニング・ヌルジャナ(コムニタス・サリハラ ヘッド・オブ・プログラム)

【ヒアリング内容】

- ・施設の成り立ち、背景
- ・どういうプログラムを実施しているか、施設としての運営方針

視察②

【視察先名】

カラナリ・テアトル・ムーブメント

【内容】

舞台芸術を通じて文化的運動を行う機関で、IDRFの運営事務局になっている。IDRF運営チームや、ジョグジャカルタを拠点にするアーティストと一緒に食事をしながら、それぞれがどういった活動をしているかなど話を聞いた。

視察③

【視察先名】

ペーパームーン・パペットシアター

【内容】

国際的に知られるパペットシアター(人形劇)のカンパニーで、日本でも度々公演を行っている。レジデンスの運営や、パペットシアターのフェスティバルの開催も行っている。ジョグジャカルタの他のパペットシアターのメンバーや、レジデンスに滞在しているオーストラリア人の学生などを交え、ランチをしながら交流を行った。

視察④

【視察先名】

テアトル・ガラシ

【内容】

多分野的なパフォーミング・アーツのコレクティブ。ラボラトリー、アーカイブと出版、アーティスト・イン・レジデンス・プログラムなど多岐にわたる活動を行っている。同じエリアにある文化施設Padepokan Bagongのディレクターなども交えて懇親会を行った。

鑑賞作品

インドネシア・ダンス・フェスティバル

- ・IDF Dance Talk “Mystical Gender: Between the Artisanal and the Banal” Didik Nini Thowok, Ishvara Devati, Joned Suryatmoko, River Lin
- ・“Bedhaya Hagoromo” Didik Nini Thowok
- ・“Ridden” Leu Wijee
- ・“This is Not a Dance” Nastaran Razawi Khorasan
- ・“Garis Tegak Lurus” Fitri Setyaningsih

インドネシア・ドラマリーディング・フェスティバル

- ・“EMESIS” Heneliis Notton (Estonia)



スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

- | | |
|----------|--|
| Day 1 | ● ジャカルタ到着 |
| | ● IDF Opening Performance: Bedhaya Hagoromo (Didik Nini Thowok) |
| Day 2 AM | ● Masterclass: Didik Nini Thowok |
| PM | ● IDF Evening Performance “Ridden” (Leu Wijee) |
| Day 3 AM | ● Masterclass: Remix 3: Powerstation/ Arus (Leu Wijee) |
| PM | ● IDF Dance Talk “Mystical Gender: Between the Artisanal and the Banal” (Didik Nini Thowok, Ishvara Devati, Joned Suryatmoko, River Lin) |
| | ● IDF Evening Performance: “This is Not a Dance” (Nastaran Razawi Khorasan) |
| Day 4 AM | ● 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター訪問、インタビュー |
| PM | ● IDFディレクター、キュレーター インタビュー |
| | ● Kampana: Ping (Ela Mutiara), 90/Now (Noutnapha Soydala), Go In to Go Out (Wayan Sumahardika) |
| | ● Evening Performance: “Garis Tegak Lurus” (Fitri Setyaningsih) |
| Day 5 AM | ● Komunitas Salihara 訪問、Ening Nurjanah (Head of Programs) インタビュー |
| PM | ● ジャカルタからジョグジャカルタへ移動 |
| Day 6 AM | ● Studio Mendut 訪問 |
| PM | ● Studio Visit & Meeting: IDRF Studio, Kalanari |
| | ● Theatre Movement |
| | ● IDRF Opening / Reading: “EMESIS” (Heneliis Notton) |
| Day 7 AM | ● studio KITA 訪問 |
| PM | ● Studio Visit & Meeting: Papermoon Puppet Theatre |
| Day 8 PM | ● Studio Visit & Meeting: Teater Garasi |
| | ● ジョグジャカルタ発 |
| Day 9 | ● 日本着 |

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



菊地 もなみ KIKUCHI Monami

ディレクター、パフォーマー

早稲田大学文化構想学部卒業。

俳優としてキャリアをスタートし、劇場での舞台班、演出助手などを経験。山形、兵庫、奄美など日本各地のフィールドワークを展開し、各地の風土や暮らしに育まれてきた表現、土地と身体をつなぐを探究する。

2023年インドネシア滞在。(国際交流基金)国や文化、分野を越えた協働と、様々な人が集う「場」づくりに関心をもつ。

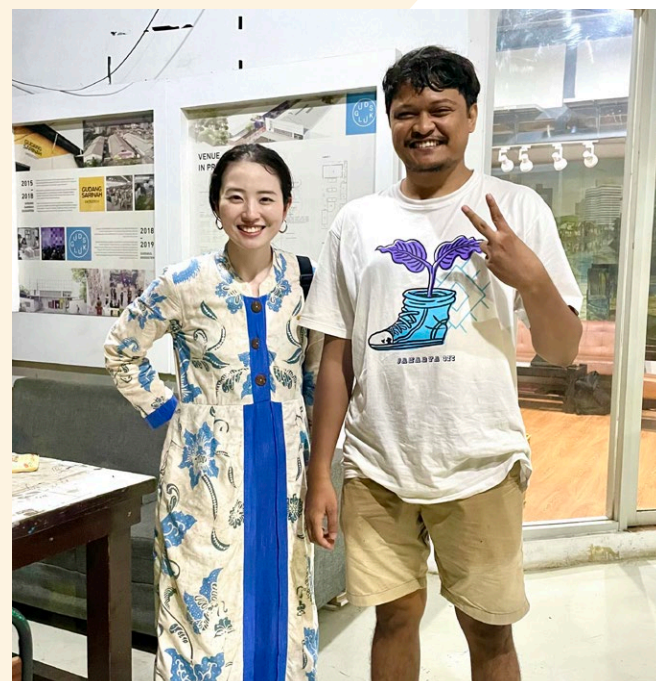
オリジナル・プログラム

GUDSKULを訪問

ジャカルタ南部にある複数のアートコレクティブが集まり運営している施設で、様々な分野のアーティストが集い、展示やイベントなどが行われ、子供や地域の人たちにも開かれた場として機能している。リサイクルやゴミ問題についてのプロジェクトを行うコレクティブなど、地域やコミュニティと協働する活動などが印象的だった。

北澤潤氏にお話を伺う

ジョグジャカルタ在住の美術家、北澤潤氏のアトリエを訪問。植民地時代のリサーチをもとにしたプロジェクトや、日本とインドネシアを行き来する中での自身の変化について話を伺うことができた。



GUDSKULにてAmyと。インドネシアにおいて、芸術文化は暮らしの中にあることを教えてくれた。

印象に残ったプログラム

ジョグジャカルタでのスタジオ訪問

ジョグジャカルタで3つのカンパニーのスタジオを訪問したが、その場にいる人々と共に昼食を食べ、様々なことを話し合った時間が印象的だった。目的がなくとも集い、共に時間を過ごすノンクロンという文化の延長にコレクティブの在り方がある、とジャカルタのGUDSKULで友人から聞いた言葉が心に残っている。

スタジオの周りに田園風景が広がり、すぐそばでは鶏の鳴き声、近くの民家では村の人が椅子に座ってのんびり外で日向ぼっこ。とても生活と地続きの場であった。



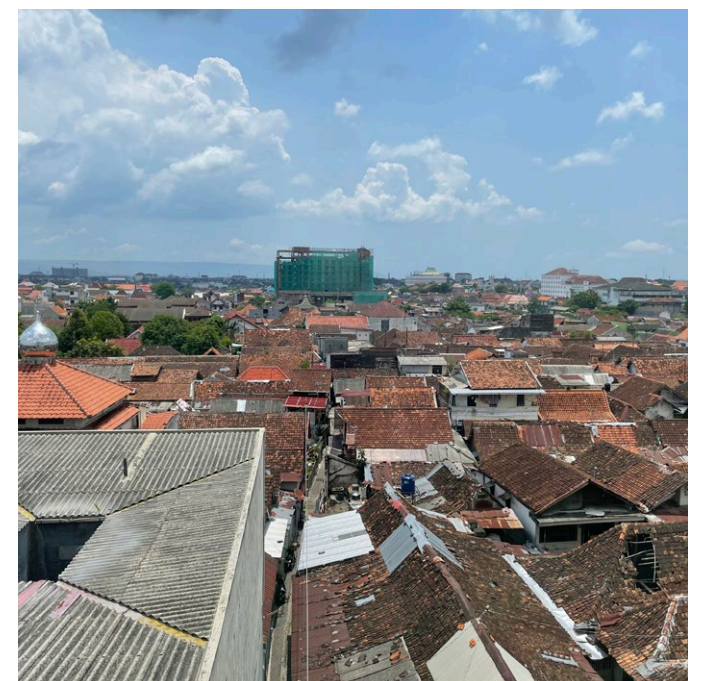
北澤潤さんと友人たちに1年ぶりに再会。日本と東南アジアの歴史についてもっと学ばなければと強く思った。

派遣プログラムを終えて

ジャカルタ、ジョグジャカルタと2都市に渡りスタジオや施設を訪れ、様々な方に話を伺うことで、インドネシアにおけるアート・コミュニティの成り立ちと文化の関係性についてより深く理解することができた。

また、国の経済、文化が発展していく大きな勢いを感じ、日本は今後アジアの国々とのように協働していくことができるか、深く考えさせられた。ノンクロンという文化のなかにある「集い、共に在る」ことについてずっと考えている。

日本の外と繋がり、その輪を広げること。広い視野を持って、日本人としてこの国の文化をどう発信していけるか、交流と対話の場を作っていきたい。



ジョグジャカルタの街並



写真：Kaoru Nakagawa

黒木 裕太 KUROKI Yuta

制作、ダンサー、演出家

2020年度東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成課程修了。以降はフリーランスとして東京芸術劇場社会共担事業に携わる。2018年からインドネシアのアーティストとコラボレーションを行っている他、地元宮崎県の中山間地域でのコミュニティプロジェクトなど、地域に根差した多様な人々との活動を展開している。

オリジナル・プログラム

若手アーティストとの交流 (IDF)

プログラムの視察やワークショップとディスカッションを通じて、対話と交流を図ることを目的としたプログラム「MATATARI」。このプログラムにはインドネシアの様々な地域で活動する若手のダンサーや振付家が参加しており、各地域の現状と地域でどのように活動を行っているのかをヒアリングした。

EVENING PERFORMANCEを行ったアーティストによるワークショップ (IDF)

パフォーマンスを行ったアーティストのワークショップが翌日に組まれていた。アーティストにとっては非常にハードな日程だと感じる一方で、観客にとっては作品創作のプロセスや意図などを深く追求できる貴重な経験であった。



Didik Nini Thowok氏によるワークショップ終了後の記念撮影

印象に残ったプログラム

ジョグジャカルタでのスタジオ訪問

IDRF視察の傍ら、ジョグジャカルタにあるカンパニーのスタジオを訪問。手作りの料理などをふるまってもらい、現地のアーティストと共に食事をしながら懇談した。このスタジオ訪問でジャグジャカルタの障害のあるアーティストや団体の話、拠点などを伺うことができた。これまで何度かジョグジャカルタに滞在したが、インクルーシブなプロジェクトに触れられる機会は得られなかった。今回は滞在期間が短く、インクルーシブな活動の視察やアーティストを訪問できなかったが、次回インドネシア滞在時には、是非交流を深めたいと思う。



Papermoon Puppet Theaterのスタジオ訪問時の様子

派遣プログラムを終えて

今回のプログラムを通じて、これまで接点のなかったアーティストやアートマネージャーと交流し、新たなネットワークを作ることができた。私は以前にも何度かインドネシアで滞在制作を行い、両国の民俗的な信仰や芸能をテーマに、コミュニティと密接に関わりながら、親交を深めてきた。

しかし、本プログラムに参加したことで、インドネシアのコンテンポラリーアートの新たな側面を知ることができ、さらにアジア圏のアートマネージャーやアーティストとの出会いの機会に恵まれた。今後もこの好機を活かし、今回出会った方々とのコネクションも大切にしながら、より発展的かつ広域的に活動していけるよう精進していきたい。



ダンスカンパニーMarrugekoによるワークショップの様子 (IDF)



寺田 凜 TERADA Rin

制作、アートマネジメント

東京学芸大学教育学部教育支援課程(E類)表現教育コース卒業。学生時代の俳優業やロンドンへの留学を経て、合同会社syuz'genに新卒入社。以降、人材育成事業や現代演劇の公演制作を担当。2021年より、東京芸術祭の人材育成事業「東京芸術祭ファーム」の制作を担当し、2024年には統括を務めた。

オリジナル・プログラム

進行中プロジェクトについての プレゼンテーション(IDF)

インドネシア国内の様々な地域を拠点とする3名のアーティストによる、進行中の作品やプロジェクトについてのプレゼンテーションやパフォーマンス。一般非公開で業界関係者と国際ゲストのみが観覧した。



ギャラリーに併設されたレストランスペースで実施された

フェスティバル参加アーティストによる ワークショップ

IDF演目を上演したアーティストを含む振付家・ダンサーによって会期中毎日実施された。若手のダンス関係者を中心としたワークショップ参加者は、演目鑑賞後にアーティストの実践や言葉に直接触れる機会にもなり、観客育成の場としても機能していた。

ドラマリーディング・フェスティバル(IDRF) 観劇

当初はインドネシアの戯曲を紹介する目的で創設されたフェスティバルだが、今年は戯曲翻訳の可能性と限界を探究することが目指され、海外戯曲5本とインドネシアの戯曲1本が上演された。

印象に残ったプログラム

IDFディレクター&キュレーターへの ヒアリング

ディレクターのラトリ・アニンディアジャティ氏、インハウスキュレーターのリンダ・マヤサリ氏は、国内外から複数のゲストキュレーターを招く「集团的キュレーション」の背景について、自分たちだけで世界を見て回るリソースがなく「彼らの“目”が必要だった」と語った。ここからも、フェスティバルとして様々なコンテキストやローカリティを表象することへの高い意識が感じられた。また、二人が30代でありながらフェスティバルの中核を担う存在であるだけでなく、上下の世代を繋ぐ「サンドイッチ世代」として、次世代育成にも注力しようと意気込む姿勢にも刺激を受けた。

派遣プログラムを終えて

性質の異なる二つの都市とフェスティバルを同時に経験できたことは非常に貴重な機会だった。当然、この二箇所だけでインドネシアの全てを見たということとはできない(し、他都市についても現地で話を聞いて俄然興味が湧いた)が、それぞれの価値観や目指す方針を知ることで、いずれかのみの訪問よりも多面的なインドネシアのアートシーンを眺めることができた。今回の訪問中、特にジョグジャカルタでは現地のアーティストやアートマネージャーと話す機会も多く設けてもらい、彼らの創造環境やニーズについてよりクリアに想像できるようになったことは、今後もプラットフォームづくりに関わることを志向する身として、大きな収穫であった。



IDRF観劇。客席最前列に英語字幕が投影された。



テアトル・ガラシにて。ジョグジャカルタのスタジオ訪問では毎回食事をいただいた。

派遣先プログラム概況

【派遣先について】

1984年以来、2年ごとにカナダ ケベック州 モントリオールで開催されるCINARSビエンナーレは、世界最大規模の舞台芸術のための会議・ネットワーク・ショーケースの国際的なプラットフォームのひとつ。60カ国以上から1000人以上のアーティストやプレゼンターら業界で影響力のある専門家が集まる。期間中は、ケベック州をはじめ、カナダ国内外から200近くのショーケースがモントリオールの主要な文化施設で開催される他、ワークショップやネットワーク・イベント、パネル、ナレッジ・カフェ、ビザ・ワークショップ、分野別ミーティング、ピッチ・セッション、トークセッションやブースなど、多様なプログラムで構成される。参加者が国際的なツアーなどの機会を開発し、世界中の関係者と関係を築き、専門的なスキルと知識を磨くことができるイベントとして世界中から認知されている。

2024年度は、第21回となり2024年11月11日から16日まで開催され、1,379名の参加登録があった。



【概要・趣旨】

CINARS会期中に開催される、ショーケースの他、フリンジやブース出展、カンファレンスなど多様なプログラムを視察。ダンス、演劇など多様なジャンルが一堂に会する場で、プログラム参加や関係者とのミーティングを通して世界規模の舞台芸術に触れる。さらに、ベーシック・プログラムとして、CINARSの組織としての設立目的やビエンナーレの成り立ちや運営についての全体的な理解を促進することを目的として、CINARS事務局及びエグゼクティブ・ディレクターとの面会を実施。またモントリオールという都市の芸術文化シーンへの理解を深めることを目的として、電子音楽とメディアアートの祭典MUTEKの本拠地であるSAT (La Société des arts technologiques) 及び、コンテンポラリー・サーカス専門劇場La TOHUとシルク・ドゥ・ソレイユの国際本部への視察も合わせて行う。さらに、必ず観劇する4作品を設定。



シルク・ドゥ・ソレイユの国際本部にて



コンテンポラリー・サーカス専門劇場La TOHUにて

【派遣対象】

舞台芸術(演劇、舞踊、音楽等全般)に関わる若手を中心とするプロデューサー、ディレクター、技術者等

【派遣期間】

2024年11月10日～18日

【プログラム・アドバイザー】

久山 友紀 KUYAMA Yuki

ケベック州政府在日事務所 文化担当官

カリタス女子短期大学仏語科卒業後、1994年カナダ・ケベック州ラヴァル大学文学部、言語学・教授学で学士号を取得。1997年より、ケベック州政府在日事務所勤務。経済部アシスタント、経済部長及び代表補佐を経て、2016年より文化を担当する。ケベック州の文化、芸術、アーティストを幅広く日本に紹介することに使命感を感じ、活動が続いている。



ベーシック・プログラム

※派遣参加者全員に必ず参加してもらう共通プログラム

視察①

【視察先名】

SAT (La Société des arts technologiques)

【内容】

1996年に設立され、デジタルカルチャーの発展と支援を目的とした非営利団体。モントリオールの中心部に所在し、没入型創造や複合現実などの技術開発における積極的かつ先駆的な役割で国際的に認められている。SATでは、毎年、コンサート、ワークショップ、会議、展示会だけでなく、MUTEKをはじめとするいくつかのフェスティバルやイベントが開催されている。モントリオールのデジタルクリエイティブ領域の取り組みを知り、都市の芸術文化の多面性に触れた。

視察②

【視察先名】

La TOHUとシルク・ドゥ・ソレイユの国際本部

【内容】

円形劇場や公園も整備された北米で唯一のコンテンポラリー・サーカス専門劇場La TOHUと、シルク・ドゥ・ソレイユ国際本部(本社)の視察。サーカス芸術都市計画(Cité des arts du cirque)の一環として、元々はゴミ集積所だったというサン・ミッシェル地域一帯に、コンテンポラリー・サーカスに特化した一連の施設が建設されている。モントリオールにおけるコンテンポラリー・サーカスの創造性、革新性、アウトリーチ、雇用の拠点として、学びから、教え、トレーニング、研究、制作、普及、流通に至るまでの循環について学んだ。

ミーティング①

【人物名】

ドゥニ・ベルジュロン(CINARS パフォーミングアーツ・マネージャー)

【ヒアリング内容】

CINARSビエンナーレの成り立ち、第21回に至るまでの経緯と現在の運営状況や最近の動向(参加者数、国内外参加者の割合、ショーケースの分野的な傾向など)。国内外から多くの舞台芸術の専門家が集まるプラットフォームとしての位置づけをどのように実現したか。

ミーティング②

【人物名】

ジル・ドレ(CINARS エグゼクティブ・ディレクター)

【ヒアリング内容】

国際展開に関する実践的なノウハウと有力なネットワークを持つCINARSが実施している海外提携、海外視察、研修プログラム、ケベックのカンパニーのサポート、具体的な出展に向けたステップ、ネットワークや商談を成功に導くための方法など。



CINARS事務局によるレクチャーの様子

観劇作品

SLAM!

カンパニー:FLIP Fabrique + Ex Machina

Fables

カンパニー:Compagnie Virginie Brunelle

1 DROP 1000 YEARS

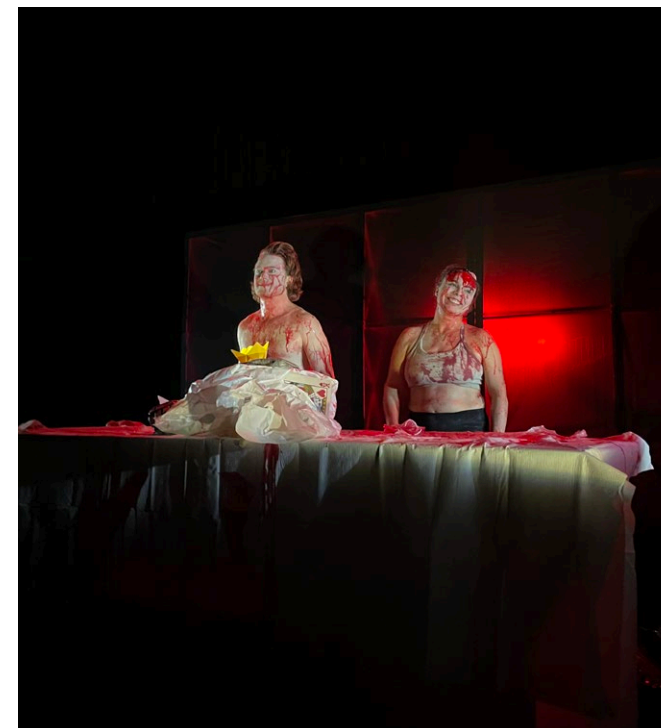
アーティスト:Martin Messier

Macbeth Muet

カンパニー:La Fille Du Laitier



SLAM!会場にて



Macbeth Muetの様子

スケジュール

● ベーシック・プログラム ● オリジナル・プログラム

- Day 1 ● モントリオール着
- Day 2 AM ● Original Program(市内視察)
PM ● New Commers Meeting, Opening Cocktail
- Day 3 AM ● Panel・Pitch Session・観劇・MTG
PM ● Opening Show (SLAM! FLIP Fabrique + Ex Machina) 観劇
- Day 4 AM ● Meeting with CINARS Denis Bergeron
PM ● Meeting with Gilles Doré
- Day 5 AM ● SAT(MUTEK本拠地)視察
PM ● La TOHUとシルク・ドゥ・ソレイユ国際本部視察
● Fables(Compagnie Virginie Brunelle) 観劇
● 1 DROP 1000 YEARS(Martin Messier) 観劇
- Day 6 AM ● 展示ブース、観劇・MTG
PM ● 観劇・MTG
- Day 7 AM ● 展示ブース、観劇・MTG
PM ● Macbeth Muet(La Fille Du Laitier)
● Closing Party
- Day 8 AM ● モントリオール発

※オリジナル・プログラムは各自異なるため、一例として掲載をしています。



臼田 菜南 USUDA Nanami

舞台芸術広報

舞台芸術業界の広報支援を担う中間支援団体にて、公演宣伝のための記事執筆やSNS運用等を担当後、2023年からはフリーランスで、これまで同様芸術分野の広報業務に加え、他業界のマーケティングにも携わる。2024年より、舞台芸術に関心をもつ人が集うコレクティブ「ゲイジツの空き地」を始動。創客につながる取り組みの実践をつづけている。

オリジナル・プログラム

幅広く作品を鑑賞

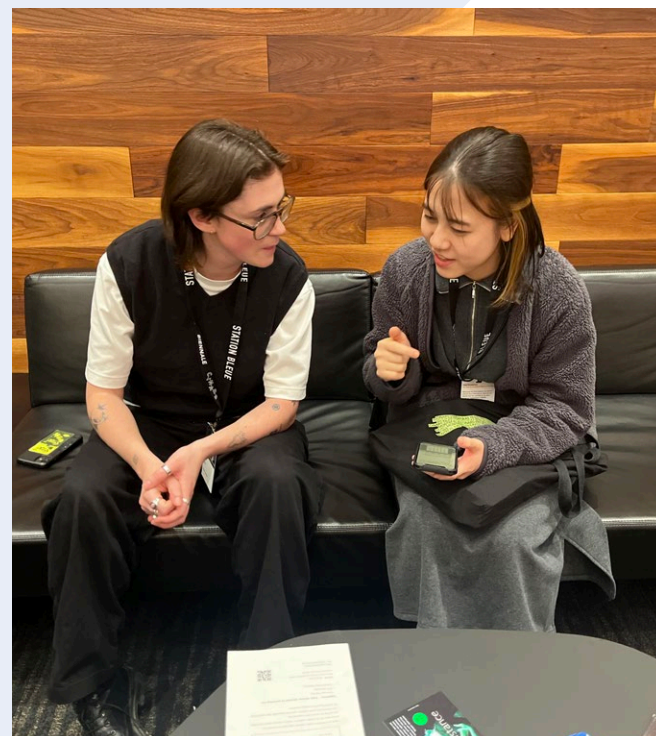
舞台芸術広報を仕事とするにあたり、演劇、ダンス、音楽、サーカス、子供向けなど、ジャンルを問わず幅広い作品鑑賞につとめた。

CINARS広報担当者への プチインタビュー実施

CINARSでCommunication agentを役職とするスタッフにアポイントメントをとり、CINARS開催へ向けた情報発信やそのプロセスについて話を伺った。

Exhibition Hallでの出展者との対話

作品鑑賞で気になった団体を中心にまわり、団体の活動について話を伺った。会話が発展した際には、広報の取り組みについてもヒアリングを行った。



CINARS 広報担当スタッフへのインタビュー

印象に残ったプログラム

各参加者への舞台芸術広報事情の ヒアリング

Exhibition Hallほか、参加者と会話する機会を得る度に、所属するカンパニー等の広報事情についてヒアリングを行った。カナダのほか、韓国、ポルトガル、フランスからの参加者にも話を伺うことができた(計10組ほど)。

どの団体も比較的、紙媒体よりデジタルツールでの広報が主流なようであった。また「充分ではないと思うが」と前置きしたり「広報の人材が必要です」と語る方が半数近くおり、現在の広報活動に課題を感じている様子がみられたことから、国内外問わず、舞台芸術の広報活動をブラッシュアップする機会を継続的につくっていききたいと感じた。

派遣プログラムを終えて

海外の舞台芸術シーンに現地でふれることは初めてだったので、文字通り非常に濃密な滞在期間であり、自身の仕事に対して“国際性”を意識するきっかけとなった。最初の機会が、世界各国から舞台芸術関係者が集うCINARSであったことは、広報として一層ひろい視野をもっていたいという点から、とてもありがたいことであったと感じている。“広報”の仕事をはりく捉え、今後は、今回得た経験や出逢いを大切にしながらコミュニケーターのような役割も担っていききたい。国内外問わずアーティストへの柔軟な伴走ができ、観客とのつながりをつくりつづけられる人になりたいと思う。



CINARS会場ロビーにて。公演のチラシが多数置かれていた。日本で主流なA4サイズはあまり見かけなかった。



大塚 健太郎 OTSUKA Kentaro

劇作家、演出家、プロデューサー

劇団あはひ主宰。早稲田大学文学部演劇映像コース卒業。2022-23年度セゾン文化財団セゾン・フェローに選出。2024年度より三井みらいチャレンジャーズオーディション(カルチャー創造部門)に採択。

オリジナル・プログラム

西川園代氏へのインタビュー

モントリオール在住の舞台照明デザイナー・西川園代氏に取材を行った。カナダの演劇事情や、日本との比較における助成制度の違い、演劇のプロダクション運営の合理性について学んだ。また、西川氏のキャリアと、ロベール・ルパージュ作品での創作手法について詳細な話を聞く機会を得た。



西川園代氏とのインタビュー風景 (Hotel Bonaventureにて)

鑑賞した作品群について

ベーシック・プログラムを除き、オリジナル・プログラムとして9作品を鑑賞。サーカスやダンスの割合が非常に高く、演劇(とくに科白劇)は少なめ。CINARSの見本市としての性格が各プログラムにも反映されてか、メディア自体を主題として実験的に取り扱う作品が多く、一方で、それらのアイデアが作品として昇華されきっていないと感じられるパフォーマンスも多かった。

印象に残ったプログラム

西川園代氏へのインタビュー

カナダ・モントリオールの舞台照明家、西川園代氏との対話が最も印象的であった。西川氏はロベール・ルパージュ作品をはじめ、多くの国際的なプロダクションに携わっており、日本とカナダの舞台芸術環境の違いを多角的に語ってくれた。

特に、カナダでは助成制度が充実しており、プロダクションの規模に関わらず、また実験的な創作にも資金が確保される点が、日本とは異なる大きな要素であると感じた。また、ルパージュの創作手法について、即興的なアプローチと舞台照明デザイナーとの密接な協力関係の重要性を学び、自身の創作活動に活かせる視点を得た。

派遣プログラムを終えて

本プログラムに参加した動機は、国際的な舞台芸術のネットワークを広げ、日本の舞台芸術を海外展開するための知見を得ることであった。実際にCINARSに参加し、様々なアーティストやフェスティバルディレクターとの交流を通じて、日本の作品を海外に向けて発信するための課題と可能性を理解することができた。

今後の活動では、CINARSで得た知見を活かし、日本国内のフェスティバル(YPAMやKYOTO EXPERIMENTなど)との連携を強化し、国際展開の基盤を築いていきたい。また、言語の壁を越えた作品制作を模索し、より広い観客層にアプローチできる舞台芸術の形を追求していく。



シルク・ドゥ・ソレイユ本社視察の様子



大野 創 ONO Hajime

アートマネージャー、アドミン、制作者

桜美林大学にて劇作、演出を学び、その後東京を中心に同年代の劇団で制作活動を開始。劇団の団体運営を請負ながら、公共の事業のアドミンとして活動。

現在は緊急事態舞台芸術ネットワークが主催する『SOIL事業』の事務局として事業を推進している。

オリジナル・プログラム

Newcomers Meeting

CINARSのオープニングイベント。さまざまな国から参加するプロデューサーとの会話により、CINARSというイベントが如何に国際的な場であるかということを実感を持って意識したタイミングだった。

Pitch Session観覧

CINARSで選考を通ったカンパニーやアーティストによるピッチセッションを観覧。舞台芸術作品のピッチイベントを初めて観覧し、上演ではない形で作品や作家の魅力を伝える方法についてとても勉強になる機会だった。



Pitch Session, Hotel Bonaventure

The Lady Next Door

教会で行われる子ども向けのパフォーマンス作品。言語が理解出来ないからこそ、他の観客の反応や姿勢から作品の見方がわかるような観劇体験が、とてもラディカルで且つ新鮮に感じた。

印象に残ったプログラム

La TOHU及びシルク・ドゥ・ソレイユの国際本部を視察

舞台や楽屋、稽古場、ステージ衣装の制作現場まで施設全体の説明とともに、シルク・ドゥ・ソレイユの歴史などについてのレクチャーを聞きながら、実際に現場を回るととても貴重な体験だった。施設の規模感や歴史などはもちろんのこと、作品に関わる人たちのプロフェッショナルな態度がパフォーマンスや観客に対してとても真摯で、学ぶことの多い視察だった。

またそのような緊張感を楽しむことで生まれる作品(Duel Reality)を前日に見ていたこともあり、完成度やパフォーマンスが高いことの理由を体感できた。

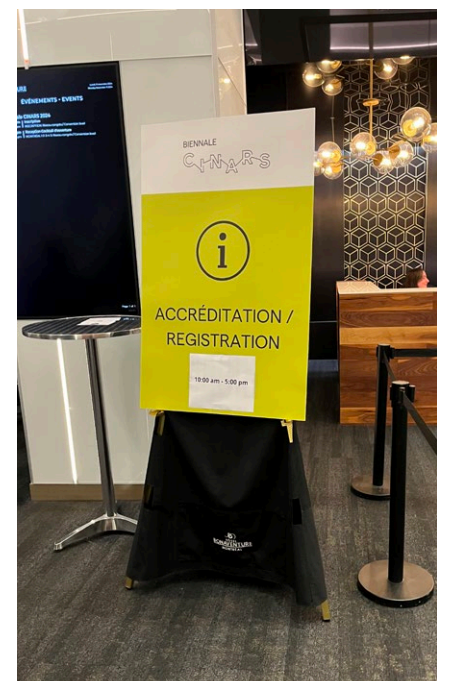


シルク・ドゥ・ソレイユ国際本部視察の様子

派遣プログラムを終えて

CINARSはとてもオープンなマーケットイベントで、想定していた以上に多くの国の方と話すことができ、また日本では感じたことのない鑑賞体験を得られた。ホテルを拠点とすることで、ネットワーキングのハードルを下げるための動線が作られていることなどプラットフォームとして参考になった。この体験を糧とし、今後の国際展開事業での活動自体にも積極的に臨むことができると思う。

しかし言語障壁によるコミュニケーション不足は個人として大きな課題となった。今後は多言語、他文化に対応できる人材となり、より広く知見を得るための活動を行っていきたい。



拠点であるHotel Bonaventureにて



写真：muraki yoshimoto

笠川 奈美 KASAKAWA Nami

振付師、ステージングディレクター

中学生から演劇を始め、大学在学中、トルコの演劇学部にて交換留学。大学卒業後ダンスに目覚める。モダンダンサー森澤碧音に師事。広崎うらん、増田ゆうこの元でアシスタントを経験し現在、振付師、ダンサー、ステージングディレクターとして活動中。

オリジナル・プログラム

Milan Pole Dance studioにて レッスンに参加

日本ではまだ数少ないポールダンス専用スタジオにてレッスン受講。様々な生徒や開かれたスタジオにサーカスの浸透力を感じた。

JOAT ON TOURを鑑賞

寒い国ではストリート文化が育ちににくいですがヒップホップをわかりやすく多くの人に楽しんでもらいたいという趣旨が素晴らしい。唯一のストリート系ダンス。



JOAT ON TOURの様子。終始歓声が絶えず楽しい空間になっていた。

プールでのsocialize

拠点であるHotel Bonaventureのプールにて毎朝CINARS参加者のアーティスト達と観劇の感想やおすすめを話しあい、様々な観点での作品の見方を知った。

印象に残ったプログラム

La TOHU及びシルク・ドゥ・ソレイユの 国際本部を視察

テーマパークに携わる者としてインバウンドでノンバーバル作品の創作が求められている昨今、学びを得て帰りたいと思い参加した。

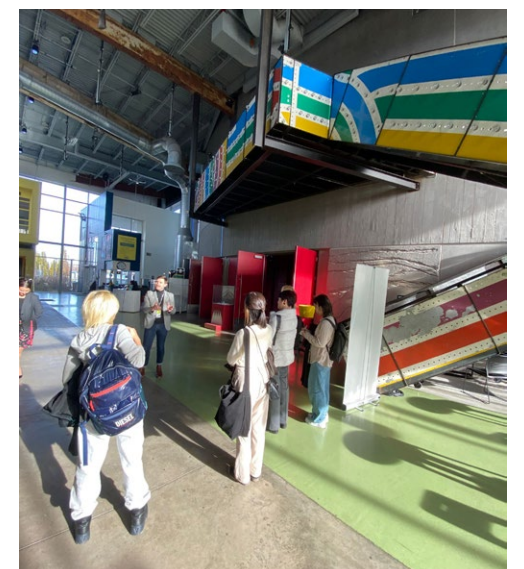
ダンスのテクニックを相談しながらリハーサルしている現場、そしてそのダンサーの美しい足の先、パフォーマーのためのトレーニング場、ジム、マンション。そしてそれを業務委託せず自社で行なっていること。社員が元パフォーマーでほとんど構成されていること。全てが見習うべき点であり、演者ファーストの姿勢が本当に見習うべき点である。私はクリエイター側なので演者は宝物だと思って接している。彼らなしには物語は成立しない。どの現場でも質の高い演者に気持ちよく働いてほしい。そんな環境を作りたい、と感じた。



シルク・ドゥ・ソレイユの本社の入り口カフェテリアの壁のオブジェ。過去の衣装をオブジェとして再利用し、過去の歴史へのリスペクトを表している。

派遣プログラムを終えて

まず、アートとエンターテインメントの違いとは何かを毎日考えた1週間だった。需要と供給、自己表現の自己満足とアート昇華への境目など様々なことを感じ、その中で自分のクリエイションの目的や己への評価基準は何かを考えたときに自分はアートの志を創作過程にもち、エンターテインメントに昇華することだと認識した。ダンスや演出、振付に関して言えば日本のアーティストの独創性や身体性は決してCINARSで見たアーティストに引けは取らない。それを今後どのように裾野を広げ、多くの人に認知して評価してもらうのが課題だと感じた。日本のエンターテインメント業界はネームバリューや、SNSでのバズりで作品や創作物を評価しがちだが、果たしてそれは本当に価値のあるエンターテインメントなのだろうかと問いだしたい。自分はCINARSでの学びを得て、結果を模倣するだけではなく創作過程の良い部分を取り入れ日本が世界に誇れる作品を生み出したい。



La TOHUの入り口にある手すりも廃園した遊園地のものを使用。アミューズメントへのリスペクトを感じられる。

報告会

2024年度の事業を振り返り、報告会を実施。

派遣参加者10名が集まり、プログラムに参加した目的や派遣先での活動などを報告した。

海外の先駆的な作品や創作現場に直に触れたことで得られた気づきや、現地でのヒアリング、関係者との交流内容など、派遣参加者同士のディスカッションや、観覧者からの質問などを交え、盛況のうちに幕を閉じた。



【開催日時】

2025年2月6日(木) 18:00～21:00

【開催場所】

アーツカウンシル東京 5階 会議室

【一般観覧者】

約80名

【プログラム内容】

- ・派遣参加者による活動報告
- ・派遣参加者へのインタビュー
- ・観覧者を交えたディスカッション
- ・ネットワーキング



総括—今後に向けて

2年目となった今年はビエンナーレの開催が多い年であり、特に2つの重要なビエンナーレに派遣できたのは大変有意義であった。現在の日本の経済状況はいまだ回復したとは言い難く、日本の芸術団体、特に若手が海外での活動にチャレンジするには、円安も影響しいまだ経済的な障壁が高い。その意味でも、派遣参加者が海外で様々な知見や経験を得る機会を提供できたことは、大きな成果といえる。派遣先でのプログラムについては、昨年同様、アドバイザーからのアドバイスを受けながら、必ず履修してもらうベーシック・プログラムと、各派遣参加者が自らの問題意識により構成するオリジナル・プログラムの2種類で構成し、バランスよく取り入れることができた。ベーシック・プログラムについては、各回ともアドバイザーの多大なるご協力があった充実したプログラムとなるとともに、オリジナル・プログラムについても、個別に調整を前提としつつも、派遣参加者同士で課題意識を共有しながら視察・インタビューを一緒に実施するなど、派遣参加者のネットワークにもつながることができた。

課題としての広報・周知

今後の課題として、昨年同様広報・周知が挙げられる。広範に事業の周知を積極的に展開していくとともに、派遣先の魅力の伝え方にも工夫が必要である。特にアジア圏への派遣については、派遣先のフェスティバルや事業がよく知られていない場合が多い。加えてプログラムが直前まで確定しない状況もあるが、芸術文化活動におけるアジア圏とネットワークを構築すること・協働することの重要性や魅力・意義を丁寧に伝えていく工夫が必要である。

長期的視点に立ったプログラムの検討

将来的には、派遣先として、映像や音楽などの幅広い芸術分野を取り込むことはもちろん、「芸術におけるアクセシビリティ」や「芸術と環境問題・気候変動」など、今日的な課題をテーマとした組み立てなども検討する余地がある。また即戦力となる中堅人材の派遣や、さらには個人ではなく団体のフェスティバルへの派遣といったことも視野に入れるなど、今後、長期的な視点にたち、将来的な東京都の文化政策として、東京の芸術関係者の海外とのつながりをどうバランスよく拡大していくか、派遣先やプログラムの検討を進めることが重要である。

成果検証のあり方の検討

人材育成の成果は本来数年以上かかると想定されるが、当該事業を持続的な事業として発展させていくためにも、今後蓄積されていく派遣先とのネットワークや連携の充実、派遣参加者の経験の他の人々への共有、派遣参加者のその後の活動のアーカイヴ、また東京都や当財団の他事業との連携など、事業成果の考え方を整理し、事業の成果検証のあり方を検討していく必要がある。

2年間の派遣事業の成果を踏まえ、今後さらに継続的に事業の実績を積み上げていき、国際芸術文化都市東京の基盤強化、国際的なハブ機能の強化につなげていくことが肝要である。

最後に今回の派遣プログラムへのアドバイスや現地との調整など、多大なご尽力をいただいたキュレーター 波岡冬見氏、YPAM ディレクター 丸岡ひろみ氏、ケベック州政府在日事務所文化担当官 久山友紀氏に、心より感謝申し上げたい。



「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」 2024年度実施報告書

2025年3月発行

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
報告書作成 アーツカウンシル東京活動支援部助成課支援デザイン担当
(石綿祐子、角南晴久、結城直子、澤田伸之、細田梨穂)
報告書編集 増田啓之(TARO inc.)

- 本書は「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」2024年度の実施内容に基づき制作・編集されたものです。
- 掲載された画像等につきましては、無断の転載をお断りします。
- 掲載された人物の敬称は省略させて頂いております。

